

ほのぼの

第 65 号

令和 5 年

11 月

発 行
信行寺門信徒会

神戸市須磨区戎町 1-2-3
TEL. 078-732-5209



ありがとうの心

前 住 職

「ありがとう」と人生を受け止める人には、「しあわせ」があります。

ある人が言う。

「もう何にもできなくなつた。人の役にも立たなくなつてしまつた。迷惑ばかりかける。私のようなものはもう要らなくなつた人間だ」と。

仏さまは言う。

「この世に要らない人間はいない。朝東の空に昇る朝日も、西に沈む夕日も同じ太陽です。老いも若きも、男も女も、生きているいのちは同じです。いのちは平等です。要る人、要らぬ人の別はない。しかし、どう行動するかを選ぶのは個人の自由です。

『いのち・生命』を『生きる使命』と読んでみてください。生きていることは役目があることです。年齢や体力には関係ありません。体力

使うことはできなくても、『ありがとう』は言えるでしょう。ことばを通じて心を伝えるのが人間の世界です」と。

「有用な」という価値観と、「大事な」という価値観があります。

私たちの日常生活では、生活の上で役に立つか、立たないか、利用できるか、できないかの判断を無意識にしています。対象が物であっても人であってもおかまいなしです。人を物と同じように扱ってしまうのも人間です。生活の手段という場では、限られた条件の中での役立つものかどうかです。役に立たなければ必然的に人も物もいらないものとなります。自分を「いなくなつた人間」と感じるのもこの考えに依存しているからです。

最も重要なのは、もう一つの「大事な」という価値観です。「大事なもの」は、いつでも・どこにいても、なくてはならないもののことです。これに気付くことによって、私たちは幸せを感じる世界に導かれます。それは「ありがとうの心」で自分の今の境涯を受け止める人生です。ありがとうの心は、自分も幸せになり

ます。まわりの人をも幸せにします。

こんな歌詞の歌があります。

「 いつか 誰でも この星に
さよならをする時が くるけれど
いのちは 繼がれていく
生まれてきたこと 育ててもらえたこと
出あつたこと 笑つたこと
そのすべてに ありがとう
このいのちに ありがとう 」（竹内まりや）

私たちは支えてもらつて今を生きています。今の自分の境涯をどう思っていますか。この世の生は必ず終わります。往生浄土の生は無量寿です。終わりがありません。

「ありがとう、おかげさま」に
目覚め、手を合わせて生き抜きましょう。

南無阿弥陀仏



長井輝子さま ありがとうございます

前坊守

信行寺にとつて長年お世話になりました長井輝子さまが八月のお盆に往生されました。

七月にご主人さまの十三回忌をお勤めになられたところでした。行年百歳の見事な生涯でした。非常に残念ですがこれもこの世ではさけられません。ただお念佛もうすばかりです。

長井さまは前住職が信行寺を継職したときから四十余年、「夫婦お二人で信行寺の維持発展に力をいれてくださいました。特に大震災で灰燼にきした本堂の復興には率先してご尽力いただきました。見事に復興できましたこと御門徒寺族ともども、感謝にたえません。

長井さまは積極的にお寺の行事に参加してくださいました。親鸞聖人の御旧跡を訪ねる研修旅



行や西本願寺での念仏奉仕団はもちろんのことですが、夏季特別法座や毎月の法座なども欠かさずお参りして聴聞に励んでおられました。その積極的な姿がよみがえってきます。

坊守として力不足の私を励まして育ててくださいましたこと、お姿は見えなくとも今でもお声が聞こえてくるような気がいたします。

長井さまは華道にも秀でておられました。再々華展に出品されていて作品を拝見いたし、その度に感動したことこの間の事のように思い出されます。

お淨土でお会いしましょう。

長井輝子さま
ありがとうございます



はりま仏教歴史散策・研修旅行

空 早苗

コロナ感染拡大にともない令和二年から中止になっていた「門信徒研修旅行」でしたが、十月六日に加古川市の鶴林寺と教信寺、小野市の浄土寺の播磨三古寺を訪れて参りました。

お天気にもめぐまれ、車中ではご住職からこれから訪れる三ヶ寺の詳しい説明がありました。

まずは播磨の法隆寺と呼ばれ、聖徳太子ゆかりの「鶴林寺」に参拝し、本堂で和讃・太子章のお経をあげました。本堂（国宝）の建築は和様、唐様の折衷様式として大変に貴重な様式であることなど、ガイドさんから鶴林寺境内の建物について丁寧な説明がありました。宝物館では「あいたたの観音さま」と親しまれる聖観音像、極彩色壁画を復元した太子堂須弥壇が展示されており、神戸の近くにこのよう立派なお寺があることを改めて知りました。

午後からはまず「教信寺」に参拝しました。教信寺のご住職より、開基教信沙弥が家族と共に賀古の里で念佛者として生活された様子を説明して頂きました。このことは親鸞聖人や一遍上人の信仰に大きな影響をあたえたそうです。教信沙弥のお名前も初めて知り、またこのような方が加古川にいらしたこと驚きました。最後に「浄土寺」に参拝しました。阿弥陀三尊立像の背後に夕日が差し込み、輝きが極楽浄土そのもののような莊厳に出来るのを楽しみにして参拝時間を合わせて行つたのですが、季節的に光の差し込みが浅く出会えず残念でした。でも斜めから見ると阿弥陀様のお顔の表情が優しくほっこりしました。



法然上人第五番靈場

「勝尾寺二階堂」を訪ねて

多田 清子



ほのぼの六十三号に、法然上人が流刑を解かれ京都に戻る途中、箕面の勝尾寺に四年間とどめ置かれた、というご住職のお話が載っていました。勝尾寺（かつおうじ）は子供のころ何度か遊びに行つた事のあるお寺です。それで久しぶりに訪ねてみようと思いました。

境内に入りますと正面の階段の上に見覚えのある多宝塔が新しく朱塗りされて建っていました。そこから案内板に沿って花の咲く道を上つて行くと一番上に二階堂がありました。その昔四代目住職の勝如上人が過ごされていたお堂だそうです。小さな格子窓から中を見ますときれいに祀られていて念佛が流れている様な温かな感じがしました。法然上人がここで念佛三昧の日々を送っていた承元四年（千二百十年）善導大師の夢のお告げを得られた

という事で、その時の両祖対面の尊影を映した壁板がご本尊だそうです。

昔見た古いお堂が二階堂であつたかどうか判りませんが、仏縁を頂いたお陰で再びここを訪ね、親鸞聖人が師と仰がれた法然上人が約八百年前確かにこの場所に居られたのだと心に深く感じることが出来ました。そして尚のこと年月を経た今日まで無事生かされて来た事をありがとうございました。

南無阿弥陀佛

夏期法座

八月十八日、第四十一回になる信行寺夏期特別法座が行われました。

今回で四十一回目を迎え、【法題】「他力の信」住職、前住職の法話がありました。また、副住職の親鸞展のお話がありました。木下さんのピアノに合わせて仏教讃歌や唱歌を皆さんで歌いました。

来年も皆さんお参りください。



「住職補任式に参加して」

住職



この度、京都の御本山に住職補任式とその研修を受けるため、門徒総代の新田様と二人で参拝させていただきました。新しく住職になつた人を対象に御門主から直に住職任命証を授与される住職補任式があるのですが、コロナ禍の影響で三年間は従来のように開催されていませんでした。今回は日本全国から各寺の住職と総代様が七十組参加されました。北は北海道、南は鹿児島からも来られていました。

浄土真宗の寺院を任される住職として、そして共にお寺の護持発展に努めてくださる門徒総代様が、改めて「寺院の役割や意義」など心に留めておくべき大切な事を研修会で学ばせていただきました。

今年は親鸞聖人ご誕生八百五十年・立教開宗八百年の節目であり、そのような年に住職補任式を受けることができましたことを大変尊い法縁と有難く思いました。

「浄土真宗とは親鸞聖人が伝えてくださった『南無阿弥陀仏』の本願名号を聞信し念仏する人々の同朋教団であり、あらゆる人々に阿弥陀如来の智慧と慈

悲を伝え、もつて自他ともに心豊かに生きることのできる社会の実現に貢献するものである」という基本理念が本願寺派の宗法にあります。浄土真宗のお寺の本堂は他宗と違い、法要儀式を行う内陣より、僧侶も門信徒も共に仏さまのお徳を讃え、仏法を聴聞する外陣の方が広くとられています。それは浄土真宗のお寺が南無阿弥陀仏のお念佛の教えを聞かせていただく道場だからなのです。

人生というのは生老病死、もともとと思うようにならない（一切皆苦）というのが釈迦様の教えのスタート地点です。では、何を拠り所に私たちは生きていけばいいのでしょうか。親鸞聖人は、「私たちの當みは、あらゆることが、皆ことごとく空しい虚構であり、いつわり」とであつて、まことのことは、何ひとつありません。そんな中にあつて、ただ念佛だけが真実であらせられる」とおおせられました。真宗というのは「まこと」を拠り所とするということです。南無（ナモ）というのは「そのまま、まさせよ」阿弥陀（アミダ）は「必ずすくう」ということ、念佛という真実（まこと）が声となつて私に届いている姿なのです。

お互いが阿弥陀さまに願われた者同士、共々にお念佛の教えを聞かせていただきましょう。

法語力レシグ

今回は、本願寺出版社の法語力レンダー、十二月の言葉を紹介します



一人一人がお浄土を 飾ってく 一輪一輪の花になる

この言葉は、行信教校校長や浄土真宗教学研究所長などを歴任された梯實圓先生の言葉です。

私達は、お店で花を見る時、ついつい「いくらするのだろうか。こっちの花の方が、つぼみが大きく、きれいな花が咲くのではないだろうか。それとも、あっちの花の方が、元気が良さそうだから長く楽しめるだろうか。」と経済的価値や、色形大きさなどによつて優劣をつけてしまいます。

阿弥陀経に「青色青光 黄色黄光 赤色赤光 白色白光 微妙香潔」とあります。これは、みんな

が同じ色にならなくてはならないのではなく、それが自分の個性のままに周りと調和して、何物にも評価されることなく、排除されることなく、受け入れられる世界ということです。

「世界で一つだけの花」という歌が流行りましたが、通ずる歌詞だと思います。人間の世界は誰かと比べられ、みんなと同じようにしないとばかにされ、競争の波が押し寄せてきます。しかし、自分が自分らしく生きることで、一人一人が人としての輝きを見いだせるのです。

何を見て美しいと感じるかは、人によってそれぞれ違うものですが、「花」は、多くの人が美しいと感じるものの一つでしょう。その中でどんな花が好きなのかも、人によってそれぞれ違うでしょう。

「一人一人」と呼びかけられるということは、私たち一人一人に対して、別々に呼びかけられているのだと思います。大勢の中の一人ではなく、ただの「一人」として。その一人がたくさん集まって、それぞれの花になります、



信行寺行事予定とご案内



◆報恩講法要

十一月二十五日（土）法話 住職

十一月二十六日（日）法話 前住職

二日間とも午後二時より三時半頃までの予定です。

ご都合に合わせて、一日でもお参り下さい。

◆新春初法座

令和六年 一月五日（金）午後二時より

お正月をお寺でお迎えしましょう。

一緒に年の初めのお勤めをし、その後、法話をご聴聞ください。



編集委員より

パソコン・スマホで簡単に用件を伝達できる便利な時代、自筆の手紙を書くことが少なくなりました。どんなに難しい漢字でも読み方さえ分かれば「スマホ」が漢字を教えてくれる。漢字は象形文字からはじまり一文字で意味が分かる便利な文字と言えます。「讚佛偈」の写経で「心」の漢字に心を惹かれ、慧・徳・隱・恒などの下ごころの語源を調べてみると、字形=心臓の形を表す象形字、字音=シン・心臓の鼓動の「織細」を意味する、字義=心臓が鼓動し、そこを人の精神のある所と考え「精神」の意味、意味=心臓・こころ・気持・考え・まごころ・しん(中心・核心)、下ごころ・りつしんべんの漢字が多いのは、中国人の精神生活の複雑・微妙さを語っていると記載されています。お経の本に書かれている漢字には読みがな・ふりがなも書かれています。お勤めの際どちらを読んで称えますか。お経の意味は「さんだんのうた」で意味されていますが、漢字の意味を知ることで「我が心に染みる」お経になるでしょう。お寺では「定例聞法の集い」「彼岸法要」「報恩講」などいろいろな集まりで法話を聞かせていただいています。複雑・悩み即ち「煩惱」を和らげることで「心に余裕」をと前住職が書かれた法話集を今一度読み直し、心の糧になればと思います。余談ですが、最近大きく話題になっているAI「人工知能」に惑わされないようしっかりと「自分の心・考え方」を持ちたいですね。 合掌 新谷 勝

